Ⅰ：宗教現象としてのキリスト教

＜前回＞　オリエンテーション

・講義のテーマ・目標（キリスト教、現代宗教学、近代・宗教）、受講の注意事項
・授業計画（前期と後期）、ＯＣＷ、成績評価の基準
・導入：キリスト教の歴史的位置づけ、キリスト教の多様性と共通性

序　論：キリスト教の現在―アジアを中心に―

1　キリスト教は西洋の宗教か？

1．キリスト教は、日本を含む東アジアにおいては、これまで西洋の宗教（洋教）と考えられてきた。その理解は、果たして正しいのであろうか。この点について、論じる場合に考慮すべき論点は、以下の通りである（オリエンテーションの導入を参照）。

・キリスト教はアジア起源の宗教である――アジアと言っても、西アジアではあるが――。
・キリスト教は西洋あるいは西欧世界以外の、世界各地において、長い歴史をもって存在してきた。
・現在、キリスト教の信徒数は、西欧世界よりも、それ以外の地域（いわゆる第三世界）における比率が高くなっている。『世界キリスト教百科事典（第２版）』（Oxford Univ. Press）のデータによれば、2000 年の推計として、

地域	信徒数（億人）
アフリカ	３．３
アジア	３．１
ヨーロッパ	５．４
南アメリカ	４．８
北アメリカ	２．１
オセアニア	０．２

2．では、なぜ、日本人はこれまでキリスト教を西洋の宗教と考えてきたのか？

この問題は、日本（東アジア）に江戸時代末期から明治時代にかけて改めて伝来したキリスト教――最初はキリシタン時代――が、アメリカを中心とする欧米のキリスト教であり、欧米教会が派遣した宣教師が、この地域のキリスト教に決定的な影響を及ぼしたからである。また、150 年ほどまえのキリスト教においては、西欧世界の信徒数がキリスト教徒全体の過半数を超えており、実際に、キリスト教は西欧世界の宗教と言っても間違いではなかった。しかし、この 100 年ほどの間に、アフリカとアジアのキリスト教の急成長によって、キリスト教徒数の地域比率は大きく変化した。

２　アジアとキリスト教

（１）アジア・キリスト教の歴史

１．アジアの諸地域とキリスト教の多様性

西アジア／中央アジア／南アジア

東南アジア／東アジア

西アジアのキリスト教は、キリスト教の誕生の地のキリスト教であって、きわめて古い。それに隣接する中央アジアのキリスト教、そして南アジア（たとえば、南インド）のキリスト教も、少なくとも 1500 年を越える伝統を有している。それに対して、東アジア（中国を別として）に本格的にキリスト教が伝播したのは、近代以降である。

２．アジア・キリスト教の共通性

・近代初頭における第一の大規模な伝播（第一の波）と、19 世紀以降の第二の大規模な伝播（第二の波）

第一の伝播は、ローマ・カトリック教会、とくにイエズス会などの修道会による世界宣教（16、17 世紀）の一環であるが、第二の伝播では、ローマ・カトリック教会に加えて、プロテスタント諸教派が活発に世界宣教を推進した。この二つの大規模な伝播に挟まれた中間時代において、キリスト教は、東アジアから撤退を余儀なくされた（たとえば、キリシタン禁令）。

・近代化の過程とキリスト教布教との関連

アジアにおけるキリスト教布教は、欧米列強のアジア進出（植民地化）とそれに伴うアジア諸地域における上よりの近代化と並行して、行われた。これはアジア・キリスト教を様々な仕方で制約することになる。

３．近代化の過程においてアジア・キリスト教が果たした二面的な意味

・列強のアジア支配の正当化、上からの近代化へのコミット

・近代化への貢献：教育、医療、人権など

４．近代日本における近代化政策

明治中期に欧化主義から復古主義への転換がなされたが、基本的にはキリスト教なしの西欧文化（科学技術）導入が意図された。その際に、西欧近代におけるキリスト教批判が反復された。

５．欧米の近代キリスト教の諸問題がアジアのキリスト教にも反映している

教派の複数性と相互対立　→　教派統合の試みと挫折

日本基督教団成立の歴史的経緯

６．エキュメニズム（教会一致運動）とアジア

（２）アジア・キリスト教の可能性

７．アジアにおいて、宗教的多元性(Religious　Plurality)とそれに伴う諸問題はもっとも先鋭に現れているが、同時にそれへの豊かな取り組みがすでにかなりの程度持続的になされてきた。　→　アジア神学の存在意義

８．アジア神学とは何か　→　オリエンタリズムを超えて（歴史概念としてのアジア）

アジア人（血・地・民族）？、アジアの言語（伝統）？

アジアという様式！

Ｑ：非アジア人による非アジア的言語で表現されたアジア神学は可能か

９．アジア神学の構造：「状況とメッセージとの相関性」（ティリッヒ）の観点
　宗教の形成・発展の場を構成する状況とメッセージという二つの極から、アジア・キリスト教を分析する。

10. 欧米のキリスト教との関わり（メッセージの極）
　アジアのキリスト教は、欧米のキリスト教に対して、二つの点で長い間依存関係にあった（あるいは、現在も依存している）。
　・社会の近代化過程の中で、宗教団体として確立するために必要な財政面での依存
　・長い蓄積のある欧米キリスト教への制度的思想的依存

11. アジアのキリスト教が健全に発展するには、こうした依存からの脱却が必要になる。たとえば、明治期の日本キリスト教の試み、あるいは現代の中国のキリスト教（三自愛国）の動向。

12. 伝統的文化・社会との関わり（土着化・文化内開花）は、キリスト教にとって周辺的な事柄ではない（→オリエンテーションで言及した本質主義批判を参照）。

Ｑ：地域的な歴史的な特殊性を免れたキリスト教の純粋形態は存在するか

＜Ｉコリント＞
9:19　わたしは、だれに対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷になりました。できるだけ多くの人を得るためです。20　ユダヤ人に対しては、ユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を得るためです。

13. アジアのキリスト思想の構築の試み
　アジアの諸地域の歴史的状況との新しい相関の形を求めて

３　中国キリスト教の場合

１．『世界キリスト教百科事典（第２版）』（Oxford Univ. Press）によれば、現代中国の宗教は次のような状況にある。

	無宗教	民俗宗教	無神論	仏教	キリスト教
1995 年	42.3 %	28.7	8.4	8.3	6.5
2000	42.2	28.5	8.1	8.4	7.1
2025	40.6	28.6	7.5	8.5	9.2

２．20 世紀以降の中国キリスト教史を理解する上でのポイント
　・近代初頭のカトリックの布教と儒教の壁　cf. 韓国、日本
　・文化大革命後の中国から 1990 年以降への大きな変化＝ 宗教政策の大展開

まず、経済的な発展、次に精神文化への回帰？

・キリスト教の容認と国家との関係性（協調と対立）

三自愛国運動（自治、自養、自伝。「教会が外国ミッションの支配から解放されて、自ら教会を治め、自らの経済において立ち、自らの力によって伝道する」）と地下教会（家の教会）

→　ナショナリズムに制約されたキリスト教

・伝統的宗教文化との関わり　→　儒教的キリスト教・キリスト教的儒教

儒教的倫理とキリスト教、祖先崇拝の問題

・東アジアの家制度の変貌、変化の中にある家族

社会変動（近代化・都市化、高齢化・人口政策の帰結）：

大家族制（宗教の社会的基盤）から核家族へ

この変化に対して、キリスト教はいかにコミットするか　→　公共性

・中国の伝統文化、現政権の共産主義、西欧的なキリスト教の三者の関係性をいかに調節しつつ、新しいキリスト教の形態を創造するという課題。

知識人の間における「儒教的キリスト教」「文化キリスト教」の動向にも注目。

＜参考文献＞

１．David B.Barrett, George T.Kurian, Todd M.Johnson（eds.）
World Christian Encyclopedia. A comparative survey of churches and religions in the modern world.　Vol.1　second edition,　Oxford University Press　2001

２．Scott W. Sunquist（ed.）, *A Dictionary of ASIAN CHRISTIANITY* , Eerdmans　2001

３．日本基督教団出版局編『アジア・キリスト教の歴史』日本基督教団出版局

４．山本澄子『中国キリスト教史研究』山川出版社

５．ジャック・ジェルネ『中国とキリスト教　最初の対決』法政大学出版局

６．丁光訓ほか　『中国のキリスト者はかく信ず』新教新書

７．レイモンド・フン編　『中国の家の教会　文化大革命を生きぬいたキリスト者』新教新書

８．芦名定道　「東アジアの宗教状況とキリスト教－家族という視点から－」
『アジア・キリスト教・多元性』創刊号　2003年　現代キリスト教思想研究会

９．森本あんり　『アジア神学講義』創文社

＜聖書引用に関して＞

本講義では、とくに断らない限り、日本聖書協会『聖書　新共同訳』から引用を行う。